

アメリカにおけるスロイド
スタンレイ・ホールにおけるスロイド批判

Hans Joachim Reincke

長谷川 紀子 訳

19世紀から20世紀への移行期、ネースの手工教育から発したスウェーデンのスロイド・システムは、ほぼ世界中の手工教育者の間で定評があった。またそのシステムは、アメリカやイギリスの学校教育にも取り入れられていた。そして、20世紀の初頭までに、このネースの手工教育から発したスウェーデンのスロイド教育システムは、4度にわたり万国博覧会に出展された。

- 1、1876年 フィラデルフィア 100周年記念博覧会
- 2、1893年 シカゴ万国博覧会
- 3、1900年 パリ万国博覧会
- 4、1904年 セントルイス万国博覧会

このように世界的に認識されていたにも関わらず、スウェーデンのスロイドは、今日でも未だにはっきりしない曖昧な理由で受け入れられず、そしてまた、ある先入観により、その当時以来、未だにこのようなスロイドに対する異議説が現存している。この偏った見解が、ネースから発したスウェーデン・スロイドのなかにある真の教育的な重要性に気付かせるのに、大きな障害となっている。

国際的に著名な学者である、スタンレイ・ホールは、この偏見にある意味で責任があり、そして、今日ネースから発したスウェーデンのスロイド・システムが、その教育的有益性ゆえに、精密に再検討されることに注目が集められるようになるにつれ、我々はホールの偏った見解における誤りを示す必要性を感じている。特に、今日の教育者や教育学者たちが、長い間忘却の中に沈められていたこの教育システムに関心の目を向けている今日においては、このことは、スロイドの名誉回復にとって正当かつ重要なことである。そして、その関心は世界的レベルまで広がりつつあり、ネース・スロイドについての詳細な検討と科学的な議論が為されるようになった。

グランビル・スタンレイ・ホール(1846-1924)は、マサチューセッツ州ケンブリッジにあるクラーク大学の心理学及び教育学の教授であり、また大学長でもあった。彼は、ドイツのハイデルベルク大学で、クノ・フィシャーとヴィルヘルム・ヴントとともに彼の基礎的研究を始めた。そして、彼がその研究を完成させたのは、1885年ヴィルヘルム・ヴントが、当時ドイツに於いては新たな分野であった心理学の教授のポストに任命されたためライプツヒヒに赴いたとき、そこへ研究生として彼に随伴していった時のことであった。そこで、ホールはヴントと共同研究をし、彼の心理研究室で研究を進めていった。ホールはまた、前世紀半ばに医者でありドイツにおける教育学と社会医学の指導的人物であったシュレイバー氏の教育的なアプローチに出会い、またここで、彼は、エドワード・ツィラーによって指導された、ヘルバルト主義者たちの学校を知る事になる。

教育に於いて、スタンレイ・ホールは、ゲームや手工の練習を通して、子ども達が筋肉を使っているときに発達が促されていくだろうという考え方を一般的には支持している。しかし、この意見に反して彼は、子ども達の発達目的に適切な手段としてのスウェーデンのマニュアル・トレーニングを否定している。そのうえ、彼は子ども達が反復的摺り込み教育で学んでいる事実を擁護し、子ども達の第一の義務は、服従であると断定している。彼は、“Die Selbstsucht” いわゆる少年の自己中心性は、そのような手段で克服されるべきであると唱えている。ドイツではこのような概念はホールだけでなくゲオルグ・ケルシェン・シュタイナーによっても唱えられている。この点に於いて、彼等の考えは一致している。彼等は、かれらの”black pedagogy”を、寛大で人間味溢れた色合いの、ありふれた弁舌でカモフラージュした。そして、それをする事で、彼等が本当にしようとしていた、子どもを無条件に服従させるという教育を隠そうとしていた。

ホールは、スロイドという問題に対し、彼の主要な著作である「青年期”Adolescence”—青年期の心理生理学、人類学、社会学、性、犯罪、宗教・教育との関係—」において、独特のアプローチを示した。そして彼は青年期の教育に対するかれの態度を示した。実際にホールの “Adolescence”を明確に理解するために、最初に著書の第2部、最終章から読むことを薦めたい。そこには、「青年期の特徴とその扱い方」に対するアプローチが示されている。この考え方の背後にある多くの難解で人種差別的な哲学を十分に把握する為にも、他の章の前にまずこの章を読むべきである。

彼は第2部の最終章 “adolescent races” で、彼自身が人種差別者であることを露呈している。彼は、ドイツの医者である、アルフレッド・プロイエツツから、“race hygiene(種の純潔)” という概念を示した。それは、当時のアーリア人の優越性を顕著に表わしたものである。「広い意味で、芸術としての人の優種養殖ということになる種の純潔はさらに発展されるべきである」というプロイエツツの考え方を受け入れ、彼の人種優種主義は頂点に達した。もし我々が、“人類の優種養殖”を、ドイツ語の “Zuchtung besonderer Rassen” すなわち “特別な人種の品種改良” という意味に訳してきたことを考慮したとき、ホールのそのような言葉の使用が何を意味しているか、その真の意味を想像できうるだろう。彼の人種差別的姿勢を評価するときに、アルフレッド・プロイエツツの存在を心に留めなければならない。彼は、1905年、その当時に於いては、アーリア族はセム族（ユダヤ人）よりもはるかに優れた民族（選ばれた民族）であるという考え方を持った、“種の純潔のための協会” (“Gesellschaft für Rassenhygiene) を創立した人物であった。

また、ホールは、スウェーデンのスロイドについて詳細に議論するとき、彼は、先ず最初にリチャード・ワーグナーの “Deutshenthum”を、他のキリスト教国を征服したとして称えたのであった。そして、ドイツの作曲家であるワーグナーに対してもう少し掘り下げて考えていくと、彼は非常に影響力のある音楽家であり、成功した作曲家である彼の行動が、ベルリンの「反ユダヤ協会」に政治的に大きく関わっていたことがわかるのだが、ホールの独特の予見がにはその新たな光をあてなければならない。すなわち、ワーグナーのドイツ至上主義は、1899年に出版された、ハウストン・チャンバレンの”Foundations of the Nineteen Century”という著書のイデオロギーの基礎となった。そして、リチャード・ワーグナーの義理の息子であるハウストン・スチュワート・チャンバレンは、この著書の中で、中傷的で、反ユダヤ的な断片を文章の端々にちらつかせた。我々は、このぞっとするようなイデオロギーがドイツにおける（ユダヤ人）大量虐殺の基となったこと、そして、ヒットラー政党が、実は 19世紀初頭のワーグナーから、そのイニシアティブな考えを得た

ことをしっかりと覚えておかななくてはならない。リチャード・ワーグナーとその一族が、ユダヤ人を蔑視する血なまぐさい熱狂者を養成したのである。

私は、スタンレイ・ホールが、1933年以降にドイツで起きたことに直接責任があるとは考えていない。しかし、彼は、ゴビノーとかチャンバレンとかいった、後に血なまぐさい人間の恥辱になっていった反ユダヤ主義を支えてきた知識人達の中に位置付けられるべきである。

これらすべてのことが、アメリカに於いて、スウェーデンのスロイドとどう関わっていったのか？スウェーデンのネースにおいて教育的スロイド創始しアメリカとイギリスにスロイドを普及させた人物は、両者ともドイツ系ユダヤ人を先祖にもつスウェーデン人であるアウグスト・アブラハムソンとオットー・サロモンである。アブラハムソンの祖先は1812年にベルリンからスウェーデンに移住し、サロモンの祖先は一時期アルザスロレーヌの居住者であった。

スウェーデンのスロイドにおけるスタンレイ・ホール

もう少し深く掘り下げて、このユニークな作業場でのトレーニング（スロイド）のシステムに対するスタンレイ・ホール受け止め方を探求していく、そして広大な視野に位置づけてスロイドの影響を理解するために、これを検討する。それをすることによって、我々はスロイドについての歪められた紹介からスロイドを守るつもりである。後に見るようにスロイドのシステムを不正確に紹介したのは、ホールであった。そして、この歪められた紹介は今日でも一般的に広まっている。我々は合理的な根拠に基づいて、ホールのネース・スロイドに対する評価について検討していく。まず、はじめにホールの文献によって与えられたスロイドへのアプローチに関する証拠を取り出す。二番目に我々は、ホールの不正確な紹介について特別な環境を指摘する。そして三番目に教育的スロイドをいかにホールがゆがんだ方法で紹介したかを以下で我々の総論のもっともらしさを示す。

彼の主要著作である、“psychology of adolescence”でスタンレイ・ホールは、ネースの教育的スロイドについて表明し、マニュアル・トレーニングのこの方法に混乱した評価を与えた。しかし、それはなぜなのか？この問いに答えるときに、ホールは青年が人間として成長していく上での運動力（*motoric powers*）の成長と機能について考察している。青年のそのような力の成長を支えるためにホールはマニュアル・トレーニングは教育的にふさわしい手段であると一般的には認めている。ホールは、労働教育の“ロシア法”にもまた言及している。そして、そこで彼はそれを、青年期における運動力の成長の目的にはふさわしくない、硬くて型にはまったものだとみなしている。“ロシア法”の教授法に限っていうと、ホールは4つの基本的な傾向を持った“*master of art craft*”を要求している。ホールは伝統的なギルドの“*craftsmanship*”に方向付けられた従来の理解の範囲で“*master of art craft*”の言葉を以下の四点で整理している。

1. アイデアを思い付き、それを具体的に表現する能力。
2. すべての五感を利用する力と、手法、工夫、処方、発見、からくりの広範な蓄積
3. クラフトの歴史に関する知識
4. 技術的な工程における技能

当時のアメリカでは、一般的にマニュアル・トレーニングは第4番目の「技術的な工程における技能」に強調点が過度におかれていたと、ホールは批判している。

「作られたものへの考慮はされず、ただその過程にばかり目が向けられている。ここに何を作り上げるのかという内容を犠牲にしたという悲劇が生まれた。そして、そのことが歴史上で教育における墮落という汚名をきせられてきた。人は道具を使う動物である。しかし、道具は、のちに人の発明をうながすものであったとしても、常に末端の手段にすぎない。道具の取り扱い方のみを教えて、その製品に対する考慮を一貫して拒否していることが、我々のマニュアル・トレーニング高校の大部分を恐ろしく内容のない、うわべだけの機関にしている。」

そして、ホールはさらに彼の考えを詳しく述べている。

「すべての点において、マニュアル・トレーニングの概念が最も考慮すべきことは、それぞれの年齢の子どもの体と意志に、そして健康と十分な発達にとって自然に必要なものでなくてはならない。それぞれのオペレーションと、のこぎり、ナイフ、かん、ドライバー、ハンマー、のみ、ドローナイフ、紙やすり、ろくろなどといった道具は、子ども達の関節の発達、左右の釣り合い、発達段階の筋肉、そして子ども達の好む動作の習性や行動に関連して研究されていくべきである」

しかし、実際には我々が知ってのとおり、これらすべての「関節の発達、左右の釣り合い、発達段階の筋肉、そして子ども達の好む動作の習性や行動」といったものが、スロイドが存在し始めたときに、スロイド理論とともに、教育的な訓練の中に組み込まれていたのである。しかし、ホールは、アメリカで、スロイド理論の特質について広く議論されていたにも関わらず、これらのスウェーデン・スロイドの教育的な本質を無視したのである。

これらの所見のあと、ホールは、たった1ページ半という鋭くて短い方法でスウェーデン・スロイドについて描き、最終的には以下のような緒論でまとめている。

「スロイドは、一連の作業課題、すなわち練習、道具、製図、そしてモデルなどを関連させた最善の試み」とし、このあとに「しかし、そこにはどの系列（シリーズ）にも、作業課題がお互いに調整しているものでさえ、生理的、一つ一つの段階の生理的、心理的な理由についての、十分な根拠を示す試みがほとんど見られずシリーズ間の調整についてもなされておらず、子どもの発達段階についての言及は何もなされていない。」これは全くもって真実ではない。それどころか、ネースのスウェーデン・スロイドのマニュアル・トレーニングの理論には、身体的運動感覚と生理学的な考慮が本質的であり、重要なものである。まさにホールは、この研究すべき点を怠ったという意味において、責められるべき人物なのである。

彼の評価をさらにみていくと、

「もし、スロイドが適切で完璧なものとして推進されているとしたら、これ(スロイド)は、確かにすべての調和や美、多様の中の統一性などの模範となるだろう。そして、そのことは賞賛者の目には、とても素晴らしいものとされうるであろう。しかし、45の道具と72の練習と31のモデルと15の組み合わせられたものといったものすべてを、デイリーワークをしている学校の先生が1年の間で、また生徒達が4年間で学ばなくてはならないことは、方法的に不可能であり、多くのシリーズの中での相互連関も不可能である。すべての二重の要求は、つまり大人からの要求と子どもの自発的な力の形成という問題は、大変難しいものである。われわれが、エデンの園を追放されて以来、知識の木のうえにありうる木工仕事と、その木の实を楽しむこ

とは両立しがたいものなのである。」

いかなる二重の要求でも、人類の墮落としてアダムとイブがエデンの園を追われて以来、そのような木工仕事（つまり労働）とその実を楽しむことは両立しがたいものであるがゆえ、知識の木がスロイドを実践することを援助することは不可能であると告発するような、浅薄な議論と無知にホールはおちいついていった。そして、そのようなキリスト教でいう“神の摂理”を主張することによって、ホールは結局、ネースのスウェーデン・スロイドを結論付けている。そして、それ以上スロイドについての検討もせずに、“gospel of work”として紹介しているトーマス・カーライルの著書に視点を移行してしまう。そのうえ彼は、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスと トーマス・ コッペンサンダーソンを“gospelers of work”として掲げ他者を押しつけている。ちょうどこの後、彼はニュルンベルグの職匠歌人ハンス・ザックス (Meistersinger Hans Sachs) という中世の人物たちのクラフトマンシップに出会うことになる。そのうえ、彼の見解のなかで、彼が歓迎した、他のキリスト教国を征服したとするリチャード・ワーグナーの”Deutschentum”とこれをすべて結合したのである。そして、むしろやっかいな議論によって彼は、“gospelers of work”の中世のクラフトマンシップと “racial adolescence” を理想的に合流させるべくアマルガム化しようとしたのである。スタンレイ・ホールは、後の結論の中で、スウェーデン・スロイドとマニュアル・トレーニングとを統合する方法の代替案を提案している。

「以上に述べた仕事の福音者たちの著作は、マニュアル・トレーニング高校やスロイドや低度の工業教育のコースを鼓舞するために使われうるし、使われるべきだし、実際に使われるであろう。しかし、それぞれが相手の存在なくしては不完全なままである。そしてこれらの本やそれらの精神に息を吹き込んだものは、道具やろくろ、教盤、鍛冶仕事を扱う人、彫刻や型を作る人、または人々が使う物の仕上げを勉強する人などにとってすべての知的なワークショップになるべきである。そして、それらの目的は、それらすべてを教えるための適合性のための免状と証明書を獲得することである」

我々は、これを、明確に批判的に読むべきである。モリス、ラスキンそしてサンダーソンは、19世紀のアート&クラフト運動の先頭にたった者たちであった。彼等は、ゴシックや中世の芸術ら芸術家について言及している。そして、ラファエロ以前のイタリア様式の絵のスタイルを好んだということで、そのグループを”Pre-Raphaelite Brotherhood”（前ラファエロ協会）と名付けている。この協会がリチャード・ワーグナー”Deutschentum”とどうして関係しなければならないのか、私の中でまだ明確ではない。ホールが選んだ方法—つまり、不明確なままに彼が放置したスロイドの種類と、ワーグナーの”Deutschentum”と”gospel of work”とのアマルガム化によって、私はホールのスウェーデン/ネースのスロイド教育に対する拒否反応は、ネース・スロイドの創始者たちのどちらもスウェーデンに住むユダヤ人を祖先に持つ家系の出身であり、そしてその中の一人が国際的商業的に非常に成功したことに對する、反ユダヤ主義の偏見をもつ人種差別主義によって動機づけられていると断定することができよう。この読み方は、人種差別主義の考えを持った人物としてホールを評価する私の考えに従ったものである。

ホールは、合理的に議論することを置き去りにし、その論争ゆえに、彼は、まともな理論を打ち出すことが出来なかった。結局、彼はネース・スロイドに対する理にかなった評価を行うことが出来ていない。彼の意見は、単に綿密さに欠けていただけではなく、誤ったものなのだと私は思っている。しかも、彼は、モリス、ラスキンなどの “gospelers of work” を引き合いに出すことによって、仕事の工業化の増加に特徴づけられた現

代の流れを食い止めようとしたのだ。ホールは、モリスなどが探求して見出した理論の中には決して存在しえない、中世の仕事の文化（仕事のやり方）に固執している。そのようにして、自己決定の生活様式を育み、適切な教育方法の基礎となっている現代の文明と教育のあり方を、ホールは否定している。

私達はスタンレイ・ホールによるスウェーデン・スロイドの拒否について議論しているが、その時期に、アメリカ国内に普及していったというネース・の受容という事実に言及しておく。これは、教育学やマニュアル・トレーニングの歴史の中でとてもユニークなことであった。しかし、スロイドがアメリカの高校教育文化に浸透していったと同時に、我々は、ビクトル・デラ・ボスによる“ロシア法”もアメリカのマニュアル・トレーニングに受け入れられてきたことも見出す。この“ロシア法”は、ネース・スロイドと同様に、アメリカの労働教育と職業教育を造り出した。{“ロシア法”についての詳細は ギュンター・プログハウス (gunter Ploghaus) の論文 (ZBW1991年1月号) とチャールズ・ハム (Charles Ham) の論文 マニュアル・トレーニング：社会的、工業的問題の解決 New York 1886 を参照のこと}

新しい展望

マニュアル・トレーニングの歴史についての最近の研究成果が、上述のこれらの見解を実証している。ミネソタやコスタリカやキューバには、依然として活動しているスロイド学校がある。またドイツにおいてさえ、工業教育や労働教育のフィールドの中でかつての有名な“ロシア法”のなごりを見出す。しかし、ロシアンアメリカンとスウェーデン系アメリカンの労働教育を新しい種類のものに融合していく過程はまだ終了していない。それにもかかわらず我々は、ホールのマニュアル・トレーニングに対するアプローチやその教育心理が時代錯誤で合理的におかしいという見解に現在合意している。

しかしながら、ホールの同時代の、ウィリアム・ジェームスの哲学的、心理学的な業績は再び注目されており、彼のプラグマティズム（現実主義）は新たに議論されている。彼のスウェーデン方式のマニュアル・トレーニングに対する評価は、もっと違和感のない、心理学観点から見ても道理にかなったものである。

「実習が、観察力、正確さと曖昧さの違いの知識や、自然の複雑さへの洞察力や本当の現象を抽象的な言葉で説明するときの不十分さに対する洞察力、といった習性を生み出すとき、それがいったん心に刻み込まれたら、心の中に一生の所有物として残るのである。それらは、正確さを与える。なぜなら、もしあなたが物事をおこなうなら、あなたはそれを全く正しいか、全く間違っているに違いない。あなたが、言葉を使わず、物を作り出すことによって自分を表現しようとするとき、両義性を含んだ表現でああなたの曖昧さや知識の無さを偽り隠すことは不可能なのである。それらは、生徒に自信を生み出し、いつも生き生きと積極的に関心や注意をもたらすものであり、教師の訓育的な機能を最小限に押さえる。」そしてジェームスは、ネース・スロイドに新しい光をあてることによって、彼の明確な高い評価を説明している。「数あるマニュアル・トレーニングのシステムの中でも、木工仕事に関する限りは、スウェーデンのスロイド・システムが、心理学的に一番良く考えられたものに思われる。幸いなことに、マニュアル・トレーニングの方法は、ゆっくりとではあるが、確実にすべての大きな都市に導入されつつある。しかし、最後には到達するはずの範囲に達するまでには、まだまだ計り知れない距離がある。」

ウィリアム・ジェームスは、早くも1898年に、アトランティック・マンスリー紙（ボストン）に、彼

の主張を發表している。そして我々は、上記の文を1899年に彼が出版した *Hand & Eye* ジャーナルのレポートから引用した。1908年にこの論文に加えて、彼は、“*Psychologie und Erziehung: Ansprachen an Lehrer*” の中で、この陳述の理由を表明している。さらに、ジェームスは1909年の “*Talks to Teachers on Psychology*” において、また1992年にリプリントされたものにおいても、彼は子どもたちの自己活動や自己信頼への性向を理解するように一般的な勸告を教師達に呼びかけていたが、その中で彼の評価を繰り返した。我々は、今日の教育者として同様に振舞うことが求められている。

Outline on Stanley Hall's "*gospelers of work*" , References and remarks は省略した